

贗作吾輩は猫である

—— 映画文学人生論

贗典：内田百閒 (1949) 「小説新潮」

原典：夏目漱石『吾輩は猫である』 (1905-07)

参考：内田百閒『ノラや』 (1957)

監督：黒澤明『まあだだよ』 (1993) 脚本：黒澤明

出演：内田百閒 松村達雄 撮影：斉藤孝雄 上田正治

奥さん 香川京子 音楽：池辺晋一郎

まあ、年を食ってるんだわ。きつと。

でも器量よしね、この猫は。

夏目漱石『吾輩は猫である』の贗作は数多く出まわっている。そのなかで贗作中の名作とされるのは内田百閒『贗作吾輩は猫である』。

苦沙弥先生の家の猫はビールを飲んで酔っばらい、大きな水甕の中に落っこちて溺死したはずだが、実は死んではいなかった。やがて、息を吹き返して、こんどは大入道の五沙弥先生の家にもぐりこむ。「つまみだしてしまえ」と五沙弥は言ったが、「まあ、年を食ってるんだわ、きつと。でも器量よしね、この猫は」とお神さんの気に入られ、飼ってもらえることになったという。

よく考えてみると、つじつまがあわない。そもそも猫が水甕に落っこちたのは明治三十八年、贗作で息を吹き返したのは昭和二十四年。その間に四十二年の時間差がある。同じ猫のはずがない。

もつとも、原典は日露戦争、贗典は大東亜戦争の戦後文学だ。どちらも太平の逸民どもが集まって、駄弁をもてあそんでいるのを猫が観察し、報告するという同じような内容なので、続篇とみなしてもよいともいえよう。

こまかなことをいえば、差異は大きい。たとえば、日露戦争は勝ち戦だったのに対して、大東亜戦争は負け戦だったので、二人とも貧乏だといっても、苦沙弥よりも五沙弥のほうが貧乏であり、しかも貧乏を売り物にしている。



映画文学人生論

贗作吾輩は猫である

下には下がいるもので、そんな五沙弥に借金を申し込む者があらわれる。朝から一粒一滴も口に入れていないという風船画伯だ。神さんが質屋から金を借りてくると、「二百両でよろしいか」と五沙弥。「いえ、百円で結構で御座います」と風船が遠慮すると、「それでは、ねえおい、家にもお金がないんだから、この百円は風船さんから借りておこうではないか」と五沙弥はいう。

猫はいつだったか寒月がヴァイオリンを五円二十銭で買ったことを思いだし、隔世の感をおぼえた。敗戦国ではインフレが進んでいるのだ。

次に訪れたとき、風船は土産を持参してきた。金を貯めている文士蛆田百減氏に頼まれて挿絵を描いているので、金に不自由していないという。

苦沙弥のモデルが夏目漱石だったように、五沙弥のモデルは内田百閒だと思いついていた読者はここで首をかしげる。いったい内田百閒の正体は五沙弥か、蛆田百減か。黒澤明の映画『まあだだよ』を観ると、百閒は猫好きな貧乏文士で、太平の逸民のようなとりまきにかこまれている。とりまきの中には「今どき月並俳句を志すとは殊勝で奇特な心懸けだ」とほめられた者もいる。金をためている文士とはとても思えない。

一と還り又一と還り丑の春

出田羅迷

奇策なしたただ悠然と丑の春

出田羅迷